

特集にあたって

愛知医科大学脊椎脊髓センター 原 政人

頸椎神経根症は自然軽快する症例が8割以上を占めるとされる。そのこともあって、手術加療は必要でないとの認識が多く、多くの脊椎外科医の中で醸成されていた。しかし、2割に満たないとはいえ少なくない症例においては、痛みや脱力のために苦しい日常生活を強いられていた。内服加療が効果を示さない症例に対して、外科的アプローチが有効であることを経験的に知っている脊椎外科医は積極的に手術を行い、良好な成績をあげてきた。

私の外来には、3カ月以上も筋力が低下したままになっていたり、頸部の動きにて痛みが出現したりして生活に制限をきたしたままになっている患者さんが受診される。神経学的高位診断が画像所見と一致していれば、手術を行うようにしており、上肢の痛みは多くの症例で消失する。筋力低下も改善を認めるが、C8神経根症では改善が乏しい印象である。もしかすると結構多くの患者さんが痛みを抱えたまま生活しているかもしれないが、実際のところはわからない。

以前と比べれば、頸椎神経根症の手術加療は多くの施設でなされるようになってきている印象である。もちろん自然軽快する可能性の高い本疾患の治療においては、有効な保存的治療の知識は必要である。しかし、改善傾向にない神経根症を漫然と見続けることは戒めなければならない。手術方法も、頸椎前方除圧固定術に始まり、頸椎前方除圧術、頸椎後方椎間孔拡大術、頸椎人工椎間板置換術など種々の手術手技が用いられてきている。どの手術方法でも手術成績は良好で、統計学的有意差はないとの報告がある。

今回、頸椎神経根症にフォーカスを当てたのは、少し前と比べて認識に変化が出てきていると思われる本疾患に対して保存的治療や外科治療に変化がみられるのかどうか、よりよい治療法は何なのかを個人的にも知りたいと思ったからである。